

最 新 ! 宗 教 情 報 ////////////////////////////////////// No. 10

◎米聖公会の分裂が公然化

【C J C＝東京】女性や同性愛者の聖職任命など性に関わる問題で揺れていた米聖公会（英国国教会）に正式な分派が誕生した。米国とカナダの保守派主教、司祭、信徒たちで結成する『コモンコース・パートナーシップ』が、シカゴ郊外ホイートンの福音自由教会を会場に、『アングリカン・チャーチ・イン・ノースアメリカ』を12月3日発足させた。700教会、会員約10万人が加盟する米聖公会に代わる組織、「管区」と自認している。

当面は米聖公会を離脱したカリフォルニア州フレズノのサンウォーキン教区、ピッツバーグ教区、イリノイ州クインシー教区、テキサス州フォートワース教区で構成される。

同日発表された声明は、「北アメリカに英国国教会を登場させるものと自らを位置づけている。「教憲草案」の公表は、聖書的、宣教的な北アメリカの英国国教会を目指す確固とした1歩だ」と、ロバート・ダンカン前ピッツバーグ主教は言う。同氏はこの9月に米聖公会を離脱、主教職を罷免されている。

聖公会の霊的最高指導者カンタベリー大主教のローワン・ウィリアムズ氏は、管区設立には特定の手続きがあり、手続きは一度開始されても終了までに時間が掛かる。今回のシカゴでの『コモンコース・パートナーシップ』に関してはその手続きはまだ始まっていない、と語った。同派の通信エписコパル通信が報じた。

『コモンコース・パートナーシップ』は、アメリカン・アングリカン・カウンスル、アングリカン・コアリション・イン・カナダ、アングリカン・コミュニオン・ネットワーク、アングリカン・ミッション・イン・ザ・アメリカズ、アングリカン・ネットワーク・イン・カナダ、コンボケーション・オブ・アングリカンズ・イン・ノースアメリカ、フォワード・イン・フェイス・ノースアメリカ、リフォーメド・エписコパル・チャーチなどの8グループとケニア、ウガンダ、南半休（南ア）聖公会と連携する主教や教会の連合体が加盟している。

◎ヨルダン川西岸で家屋占拠のユダヤ教徒入植者を強制排除

【C J C＝東京】イスラエルの軍と警察は12月4日、占領地ヨルダン川西岸のパレスチナ自治区ヘブロンで、1軒の建物を違法に占拠していた約200人から250人の過激なユダヤ人の入植者らを強制排除した。入植者は投石などで抵抗。当局は催涙ガスで応戦し、双方の計約35人が負傷した。

入植者らはこの建物をパレスチナ人所有者から購入したとして、07年3月から住み着いていた。ただパレスチナ人側は売却を否定している。イスラエル最高裁は11月中旬、所有権を認めず明け渡しを命じていた。

入植者の多くはユダヤ教正統派で、入植を「神に与えられた『祖先の地』への帰還」と正当化。付近のパレスチナ人住民と衝突を繰り返す一方、最近では強制排除を阻止しようとして、当局に対しても暴力を激化させていた。入植者たちの暴力や家屋占拠が頻発するヘブロンで、入植者の強制排除が行われたのは06年5月以来。

ヘブロンでは4日夕から夜にかけ、極右ユダヤ人の若者グループがパレスチナ人に発砲や投石を繰り返し、AP通信によると、パレスチナ人計17人が負傷した。極右グループはまた、パレスチナ人の家屋数戸や車両などに放火した。強制排除に反発し、騒ぎを起こしたと見られる。ヘブロン以外の西岸の数カ所やエルサレムで、極右グループが通行車両に投石し、20人以上が拘束された。

H・リチャード・ニーバーの 生涯と神学

1

生涯

- 1894年、ドイツ移民の子として、オハイオ州に生まれる。
 - 父グスタフ・ニーバーは17歳のときにドイツから移民する。イーデン神学校に学び、北米ドイツ福音教会の牧師となる。
 - この家族から2人の偉大な神学者が出る。兄ラインホルド・ニーバー
- 教師として、エルムハースト神学校(教派の神学校。30歳、学長となる。3年間)→イーデン神学校(母校)→イエール大学
- 1930年、イーデン神学校在職中に8ヶ月の休暇を与えられ、ドイツを旅行した。このとき弁証法神学の影響を受ける。
- 1932年にはティリッヒ『宗教的状况』を英訳し、ティリッヒ神学をアメリカに紹介した。
- 1962年、イエール大学を引退した年に逝去。

2

神学的特徴——応答の倫理

目的論的倫理

「製作の人間」(man-the-maker)
目的合理的な生き方を理想とする。
例: アリストテレス、トマス・アクイナス

義務論的倫理

「市民的人間」(man-the-citizen)
何が法であり、自己の生活の第一法則は何か、を問う。
例: カント(厳格な倫理的形式主義、定言命法)、プルトマン(決断という形式主義)、バルト(戒めという形式主義)

応答の倫理(ニーバーの立場)

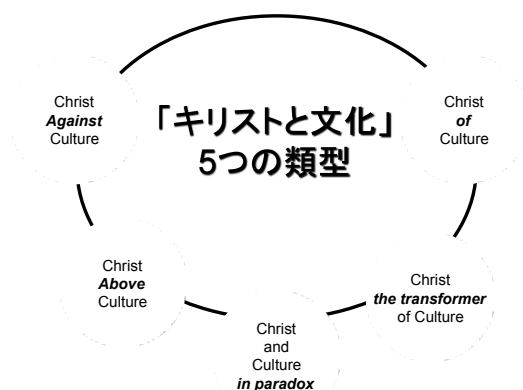
「応答する人間」(man-the-answer)
現実を尊重する。「現実性は、常にわれわれがそれを押し込みたいと思う理念の範型をはるかにこえて広がるものである」(Responsible Self, 67)。社会と歴史において何が起こりつつあるかを解釈する。

3

『キリストと文化』

- 「文化」とは？
 - 「文化とは、人間が自然的なものの上に重ねる『人為的、第二次的環境』である。それは言語、習慣、理念、信念、慣習、社会的組織、文化財、技術工程および価値から成っている」。(マリノフスキーの定義に依拠)

4



5

(1) 文化に対立するキリスト Christ against Culture

- 両者の間のoppositionを強調する急進的立場。文化からの忠誠要求を断固として拒絶する。
- 例
 - 第一ヨハネ書(ローマ文化の拒絶)
 - テルトリアヌス(アテネとエルサレムに何の関係があるのか)
 - 修道院運動
 - トルストイ(文化否定論者)

6

(2) 文化のキリスト Christ of Culture

- 両者の根本的一致の承認。両者の間に何の緊張も体験しない。
- 例
 - － グノーシス主義者
 - － 中世の神学者アベラルドゥス
 - － 近代の「文化的プロテスタンティズム」のA・リッチュル
 - － 社会的福音

7

(1)(2)に対する批判

- (1)に対して
 - － 文化の中で神の行為に応答し、キリストに従うべきことを無視している。
- (2)に対して
 - － 神の恵みが文化の中で埋没し、限定され、規定される危険性を見過ごしている。
- (1)(2)に対して
 - － 罪を限定している点において一致している。テルトリヤヌスは、罪を動物的本能に限定し、また、社会的福音はある種の社会制度に限定する。

8

(3) 文化の上なるキリスト Christ above Culture

- 両者は階層的な関係において調和する。
- 例
 - － トマス・アクイナス
- 批判
 - － 文化の歴史性、流動性を無視することになり、相対的なものを絶対化してしまう。

9

(4) 逆説におけるキリストと文化 Christ and Culture *in paradox*

- 神の恵みの行為と人間の罪の行為がせめぎ合う緊張関係の中に、人間は置かれている。キリスト者は義人であると同時に罪人である。文化が無神的であり、罪に満ちていることを知っているが、自分たちが属している文化から抜け出せないこと、そして、その文化を神が支えていることを逆説的に承認している。
- 例：パウロ、ルター、キルケゴール、トレルチ
- 批判：神の創造的行為を軽視している。

10

(5) 文化の変革者キリスト Christ the transformer of Culture

- 神とキリストの創造的行為が強調される。神の創造的行為とキリストの贖罪の行為は密接に関係している。キリストは文化のただ中に介入し、そこで贖罪の行為を果たす。文化は神関係の喪失を本質としているのではなく、神関係の錯誤が問題。
- 例：ヨハネ福音書、アウグスティヌス、カルヴァン、ウェスレーなど

11

『キリストと文化』に対する批判

- 文化の主流のみを取り上げている。
- 文化を自立的なものと見なしている。
- 非政治的な解釈。
- S・ハワーワス『旅する神の民』(*Resident Aliens*)
 - － 「わたしたちの現状を正しく分析する上で、およそ『キリストと文化』より障害となる書物はないと確信している」

12

『近代文化の崩壊と唯一神信仰』

【単一神主義】

国家主義
文明
宗教的共同体



【多神主義】

価値の多元主義

【徹底的唯一神主義】

「わたしが存在しているゆえに価値づけられ、またあなたが存在しているゆえに愛され、存在しているどのようなものでもただそれだけで愛される価値があるという確信」
「すべては善であるという確信」

13

影響史

- キリスト教と文化の関係の批判的考察
- ポスト・コンスタンティヌス主義の自覚
 - － 教会(コルプス・クリスティ Corpus Christi)とキリスト教世界(コルプス・クリスティアヌム Corpus Christianum)とを厳格に区別する。
- 教会は権力を聖別するような誘惑(ネオ・コンスタンティヌス主義)に陥るべきではない。

14